

三才児の積木遊びの研究

— 観察記録とその一考察 —

井 栢 佐 以 子
渡 辺 亮 子
井 手 道 子

【研究対象】

愛育幼稚園児43名を対象に37年度、一カ年間、時間を限定せず、あそばれる都度、保育者が規定の用紙（第1図）に記録しました。対象児は週三日保育児であり、家庭環境は両親健在、生活水準中程度のサラリーマン家庭、使用積木は箱積木小型一組、タワー積木一組です。

【観察記録の方法】

第一に積木あそびに対する興味の程度を遊ばれた日数・参加した人数・継続時間からとらえてみました。この遊ばれた頻度は、これ

【目的】

三才児の保育室には積木が用意され、その積木が時々使われてはいましたが、共同玩具であり、また構成玩具である積木が、果して三才児にとってどの程度興味を持たれ、また役立っているかについて疑問を持っていましたので、一年間、特別な指導は加えない状態で観察しました。そして、この疑問を明らかにすることによって、三才児の特質、三才児保育の特殊性の一端を把握できるのではないかとこの期待のうちに、この研究を始めました。

第1図 三才児の積木あそび

(1)	月 日
(2)	人数 初め () 中頃 () 終り ()
(3)	氏名 () () ()
(4)	継続時間 (時 分) ~ (時 分)
(5)	終りのきっかけ
(6)	子どもの会話

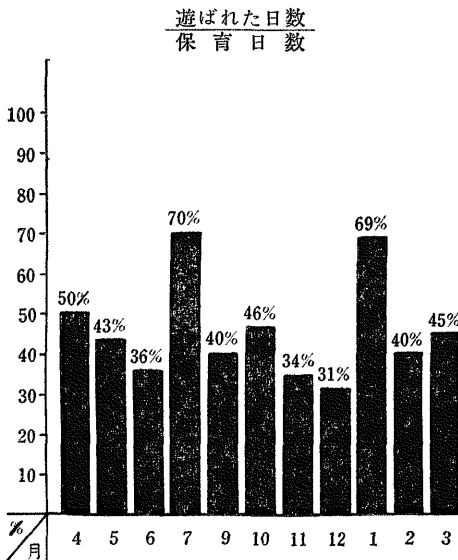
を月ごとにまとめる際、保育日数に対する遊ばれた日数で表しました。(第2図)次に参加人数は、一回の積木遊びにおいて、初め・中頃・終りと三度人数を記入し、そのうち最大人数をその時の参加人数とし、それをもとに月ごとの平均を出しました。(第3図)参加者としたわくづけは、積木を出す子ども・積木を手渡す子ども・積む子ども

もを含めたもので、したがってこの人数はグループ編成に関係のない人数です。継続時間は、積木遊びを始めた子どもとの継続時間をその時の積木遊びの継続時間としました。例えば作るものが変化しても、最初に参加した子どもが一人でもその遊びに参加している場合には継続しているものとみなし、最初の参加人員が全員ぬけてしまった時を終りと定めました。そして、この継続時間は、積木を出す・積む・積みながら遊ぶ動作、これらを含めた時間です。

○第二に構成における変化を記録・写真・図で記録しました。

○第三に積木あそびの中で見られる友達同志のつながり、また社会性の一端を会話や状況の記録によってとらえました。

第2図 遊ばれた頻度 (%)

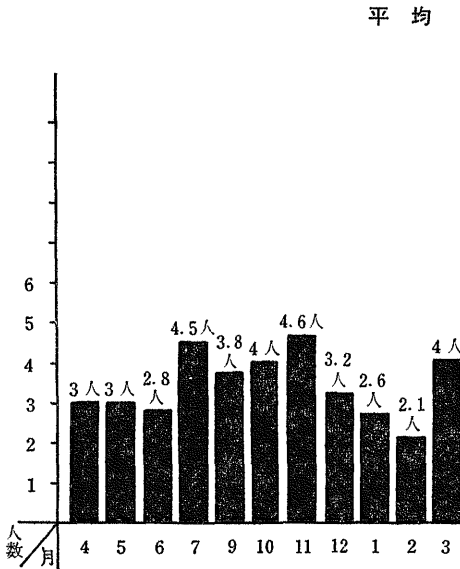


これらをとらえるため記録用紙を六つの項目から作成しました。それが上の第1図であります。その用紙に積木で遊ばれる都度記入し、その記録を月ごとにまとめ更に一年間を集計した結果は次のようでした。

【整理及び考察】

○第一の積木あそびに対する興味の程度は、その結果をグラフ第2図・第3図から見ますと遊ばれた日数や、一回の遊びに参加する人数においては、一年を通しての増加はみとめられませんでした。

第3図 一回の積木あそびに参加した人数

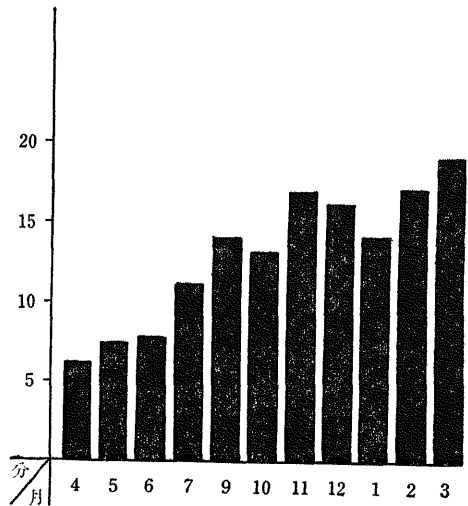


即ち、積木遊びの頻度をみますと、七月・一月が多いのを除いては他の月は約30%～50%の間の数を上下しています。したがって一年を通しての上昇は見られません。また、参加人数においても図のよう一年を通しての上昇はみられませんでした。

次第に遊びの領域が広まり戸外あそびが日ごとに活発になるのに比べ室内で遊ぶ積木あそびはそれほど盛り上がりを見せず戸外遊びのできない状態の時に主に遊ばれていました。例えば雨の日や、食後など室内で過ごさなければならぬ時です。

一方、継続時間から見ますと第4図のように一学期・二学期・三

第4図 一回の積木あそびの継続時間 平均



学期と各学期ごとに次第に増加する傾向がみられました。三才児にとって積木あそびが興味を持たれているかどうかは別問題として、この継続時間の伸びは構成されるものの内容が深まり集中してあそべるようになったことを意味するものと思われました。

以上、積木遊びの頻度・人数・時間について年平均を求めると、頻度45%、継続時間十二・三分、参加人数三・六人となります。また参加人員を男女別に見ると男児71%女児29%で、男児の参加が圧倒的に多く約七割をしめています。女児は構成することより、傍観的な立場であったり、でき上った時にその遊びに仲間入りすることや

他のママゴト遊びなどをすることが多く見られました。男児の参加が多いという結果が出たことは、それが環境的なものであるか本質的なものであるかを決定づけることはむずかしいと思いますが、たいへん興味のあることでした。また同じ男児の参加者の中でも四月～九月・十月～三月生れの子どもにわけますと、わずかずつではあります。前者の方が大きい数字が出ました。

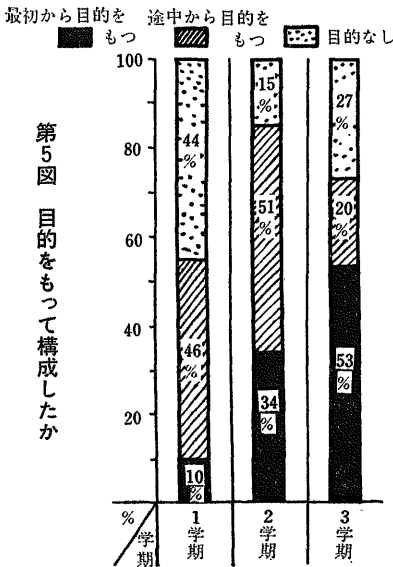
以上、積木あそびに対する興味のもり上がりは、はっきりみられませんが、保育日数の約半分は遊ばれたことになります。

積木遊びの初めは一人で始められたことが多く、それにつられて二人・三人と参加し、一人で終了することはまれでした。友達が遊んでいることに刺げきされて仲間に加わることが多く、三才児でも積木を共同玩具として使用していることを知りました。一方、次第に社会性が発達し、友達関係が広がるとともに、他の子どもにあそびに気をとられ、じつくり物ごと集中するという内的な芽生えを阻害している場合があるのではないかとこの疑問が出、構成力を伸すために他のことに気が散らないで積める独立した室が設けられた方がよいのか、刺げきを与え合うように保育室の一隅におかれた方がよいのかについて考えさせられました。三才児の場合は、すべての子どもに対し、それに対する興味の芽生えを培う意味では確かに後者の方がよいと思われませんが、並行的に遊ばれる他の子どもにこわされたり、それを制止する行動が実に多くみられ、積木の量・遊びのス

ペースについて考慮する必要があると思われました。しかし構成してはこわし、こわしてはまた構成するなど、こわすことも遊びの一部のような状態も見られました。

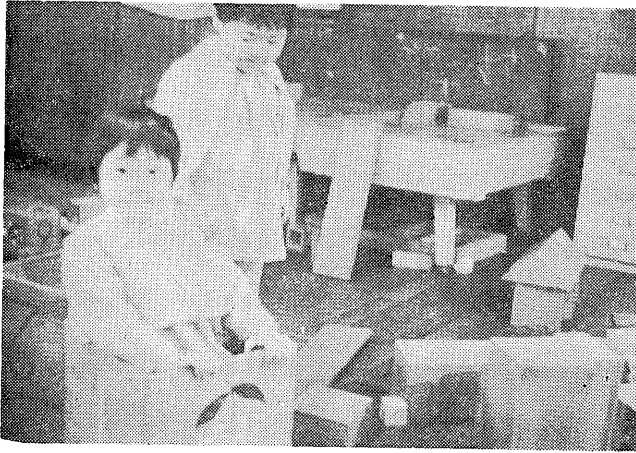
○ 次に第二の構成における変化は写真や記録をもとに次の三項目において考察しました。

先ず(一)の項目では目的をもつて構成するかについて観察しました。その点では、初めの頃は目的を持たず作ることが多く、「何を作っているの」と聞いても、わからないと答えるか、だまっている場合が多かったが、一学期後半頃より構成の途中または構成されてから目的を定めることが見られ三学期の初め頃から何を作ろうとの目的を持って構成される場面が多くみられました。あそばれた場面を(a) 目的のないもの、(b)途中、またはでき上ってから目的をもつもの、



第5図 目的をもつて構成したか

(1) タワー積木をお風呂に



(2) 積木をごっこあそびの荷物に



(3) ただ、横につなげて汽車に



(c) 最初から目的をもったものの三つに分類し、学期ごとに棒グラフであらわすと第5図のようになりました。一学期は目的のない場面及び途中、またでき上ってから目的をつけたものが90%を占めていました。その数が二学期・三学期と次第に減少するのにならべ目的を持った構成が増し、三学期にはそれが53%を示しました。次第に

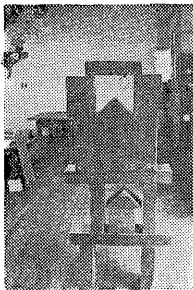
発達してゆく過程がこの数字から伺われました。
△二学期は、使用する積木の量も少なく、でき上りという限界がはつきりしませんでした。
△一学期は、使用する積木の量も少なく、でき上りという限界がはつきりしませんでした。
△二学期は、たくさん積木を使用し、立派なものを作ろうとのこ

(4) a 他の遊具と組合せて乗物（ヘリコプター）をつくる

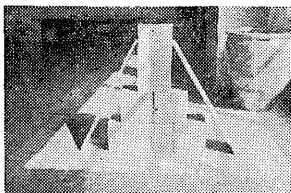


b

(5) 左右対象のものを作る



(6) スベリ台

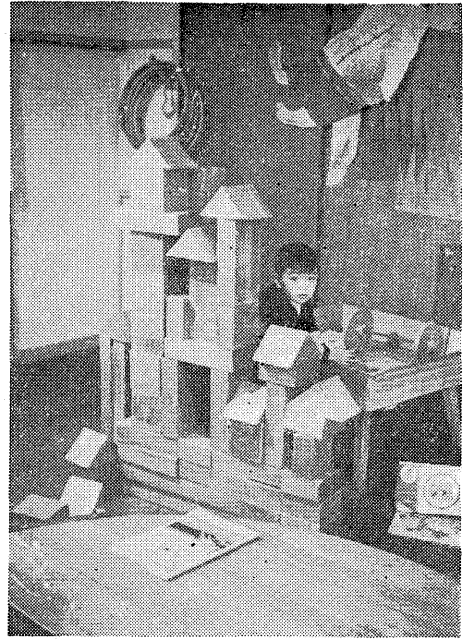


△三学期は、積木の量に左右されずでき上げるまで作ることが見られました。

とばもきかれ、それにつれて積木全部を使おうとし、積木がなくなった時完成したという傾向が多くみられました。

これら(一)(二)の項目の結果から考えられますことは、一学期にはた
いへん、ばく然と無計画に積まれていたものが二学期 九、十月頃よ
り目的をもった構成が急に増し、それと相まって構成自体に対する
意欲と、完成するまで作ることが見られて、その完成のしかたも最初
は積木の量に支配されていたものから、量には関係なく自分の意志
によって完成させることが見られました。そして、この(一)(二)の項目
における一学期から二学期にかけての伸びが二学期から三学期にか
けてのそれよりも大きくみられました。一方、第5図に見られるよう
に、減少するはずの目的を持たない構成が二学期より三学期に増し
ていることは、この項目の調査が主に会話の記録にたよったためこ
とばに出して言われない場合は、それが数として加えられなかった
ことによるものではないかと考えられます。例えば話し合いはして
ないが二人が(二人まで)協力して作ることが見られます。Aが作っ

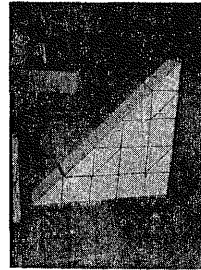
(7) 家



たものをBが高さをそろえるためになおすと、それを見ていたAがだまって見て、納得する。二人とも家をつくっているつもりらしいがお互いの会話はほとんど交わされていないといった場合などです。
 (三)の項目では、どのような構成が見られたかを観察しました。その一部を写真で示しましたが、

- 初めは積木をもて遊ぶ状態でした。
- △タワー積木の中に入ってあそぶ。
- △ごっこ遊びの荷物にする。
- △横につらねて汽車のようにする。

(8) 三角積木を選んでの構成



(9) かいだん(長四角積木を選んでの構成)



などの他、何も構成されずに出すだけで終ることが多くありました。

●一学期後半では、船・汽車・ヘリコプターなど乗ってあそべるものを、他の遊具・椅子・籐の輪・マットなどと組合せて遊び、構成自体より、構成したもので遊ぶことを楽しんでいました。

●二学期後半より左右対照の構成なども見られました。

●三学期後半には積木を選んでの構成などもみられ構成の過程をたのしむようすが見られました。(同じ三角積木のみ集めてびっしりつめたものや長い積木のみ集めての汽車・ひな段など)

三才児なりに単純なものから次第に複雑なものへの移行がみられました。

○第三の積木あそびの中に見られる友達同志のつながりは、遊びの状況及び会話の記録をもとに考察しました。主観的判断になるの

を避けるため、幼児の会話そのものの記録にポイントをおき、聞きもらさないよう努めました。が実際には、他の遊びに参加している子どものさわぎ・会話にならない声（奇声）・同時に数人の子どもの声の重なり・その他聞きとれないようなつぶやきなどのため、完全な記録はとれません。しかし記録として残された六五〇回の会話から大体の傾向をつかむことはできたと思います。

(-)の項目で、あそび方の変化についてみ、それが第6図です。

最初は、一人あそびまたは並行あそびが主であり、会話も一人ごとが多かったのが、一学期の後半になって「こわしちゃだめ」「あぶない」などの制止のこぼや、先生に対する話しかけや、助力を求めるこぼやが多くなりようになりました。（これみて、よくできたでしょ、これどうするの、などです。）

二学期後半頃からは先生に対する話しかけが少なくなるとともに、友達同志で相談しながら作ることも見られるようになりました。

例① 十月の記録から

A 「この上に何をのせるの」

B 「煙突だよ」

A 「お家に椅子もいるんだね」

B 「椅子をもってこよう」

例② 1月の記録から

A 「動物を作ろうよ」

B 「動物園がいいわ」

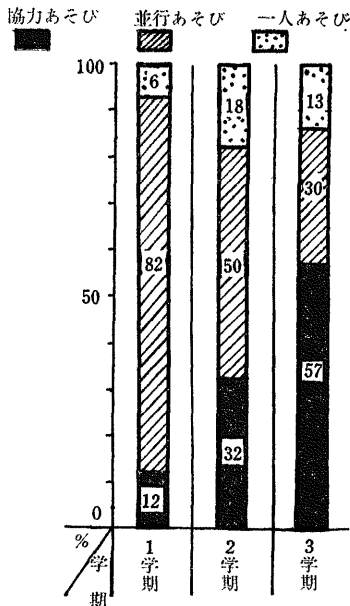
A 「そう、動物園にしよう」

B 「きりんを作ろうよ」

A 「きりんってどうするの」

B 「あ、これでいいよ」

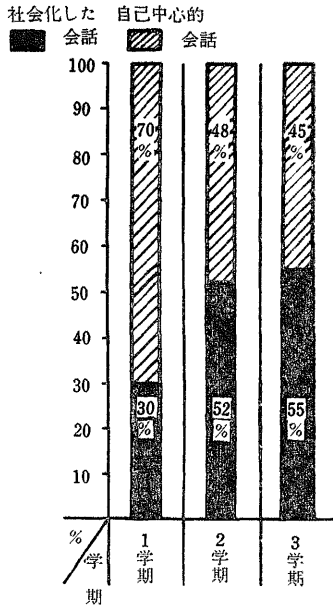
しかし、相談と言っても初めは二人または一人の子どもを中心に二〜三人がその子どもに聞きながら作るといった単純な型のものであり、その後次第に制止のこぼやが少なくなり対等の立場での相談



第6図 あそび方はどうか

やお互同志批判しあう姿なども見られるようになり、先生にいちいち話しかけなくとも自分たちだけで遊びが楽しめるようになりまし
た。

あそびの状態を一人あそび・並行あそび・協力あそびに分類すると図のようになり、一学期には一人及び並行あそびが88%を占めていたものが次第に減少し、三学期には43%となり、協力あそびが57%を示しました。一年を通してみた場合には、三才児の積木あそびは概して並行あそび、また単純な型の協力あそびでしめられ、一人あそびは問題にならぬほど少ないものでした。このことから、友達とつながりを持って遊ぶことを求める年代であり、協力的なあそびへと移行する年代であることが察せられました。



第7図 内容からみた幼児の会話

(2)の項目で記録に残された幼児の会話をピアジェの方法で分類し、会話が社会化してゆく状態をみました。ピアジェは、幼児の会話はどのように発達するかについて、自己中心的会話と社会化した会話とに大別し、自己中心的会話として反復(ただ話すことをたのしむため機械的に反復するもの)・独語(自分に向けて話すもの)・集团的独語(仲間の存在が話の誘引になっているが聞き手を考慮しないでしゃべるもの)を含め、社会化した会話として順応的報告聞き手に順応して自分の思想を述べるもの)・批評(他人の仕事ごとや行動について批評するもの)・命令・請求・質問(他人に答を求めるもの)・答が含まれ、これら二つの割合を年令別に出していますが、私達がこの方法で分類した結果は第7図のようになり、一学期には自己中心的会話が70%を占め、二学期にはこれが48%、三学期には45%と減少しています。この45%はピアジェが五才く七才のものとしてあげている数字と一致しています。

以上、これらの調査の結果から三才児の構成員や社会性が、この積木あそびを通して助長され、この積木遊びが三才児にも殊に男児に興味をもたれ利用されていることがわかりました。この研究においては、地域環境・家庭環境ともに、ごく限られた約四十名の当愛育幼稚園児の調査に止まりましたが、一つのアそびを通して三才児の発達過程の一端を把握することができました。

(愛育幼稚園)